東日本大震災…あの日から

グループ〈わ〉でも支援活動

学長　今井鎮雄

▲2011年4月の入学式で

３月11日は大きな会議を翌日に控え、2千人近くの参加者とゲストへの対応を打合せたあと、午後遅く自宅へ戻りテレビをつけると、大地震と津波に襲われた東北地方と交通網が混乱し人々が苦労して帰宅しようとする東京の映像が流れていました。

急遽キャンセルをとの意見も出た会議ですが状況を見ながらプログラムを進めることになり、翌日の会場では事務局の呼びかけで義援金が集められる一方、福島の原子力発電所で事故が起きたらしいとの情報が囁かれ、ラジオのニュースに注意を払いながら13日の会議終了まで緊張は続きました。終了後のパーティーで頼まれていた乾杯の音頭は、大地震と大津波の犠牲になった方々のご冥福を祈る言葉に代えさせてもらいました。その後、被災地の知人に安否を尋ね支援物資を送ったのですが返事はなく、彼らの無事がわかったのは３月も末のことです。

４月になると、私の属しているクラブの若い会員たちがワゴン車に食料品や水、子どものための本を積み込み、十何時間かの道のりを交替で運転しながら被災地へ向かいました。

神戸市民の募金を早く被災地へ届けたいと、福島、宮城、岩手の県庁を訪問したのは、５月中旬です。福島で知人の事務所を訪ねたところ、多くの人は埼玉や山梨にある福島県民の避難先を激励に出ていて、会うこともできない状況でした。

福島原発の事故は世界規模の問題になりました。近代世界は懸命に働きモノを大量に生産することで繁栄してきたのですが、1986年のチェルノブイリ原発事故のあと、ドイツの社会学者ウルリヒ・ベックは著書「危険社会」で、原発の開発は大きなリスクを伴うもので人類の歴史の一つの曲がり角を示すものだと指摘しています。経済社会の繁栄の裏には原発のような世界全体を巻き込むリスクが伴うことを覚え、今後どのように人間は対応するのかを考えることは、私たちがいま向き合わねばならない重い課題になりました。

グループ“わ”の皆様は、東日本大震災後まもなく被災地救援のための募金活動に、また東北支援チームを結成して現地に赴かれるなど、長期的な視野に立って被災地で苦しみ悩む方々に寄り添ってくださっています。あの日から「再び学んで、他のために」のモットーそのものである支援活動を展開してくださっている皆様に、この機会を借りて心から御礼を申し上げます。（2011年11月）

東北支援のこれから

第1次・2次チーム派遣を終えて

3月から始めた東北支援活動。募金や2回にわたるチーム派遣、現地の子供たちの招待などを実施してきたが、①効果はどうだったか、②反省点は何か、③今後の展開をどうするか、について総括してみると――。

募金は神戸市に委託したこともあり、反響を直接つかむことはできなかったが、7月・10月のチーム派遣はかなりの手応えを感じた。現地の状況を肌で感じ、被災者と直に交流することができた。「神戸から」というだけで、悩みを相談されたケースもあった。とりわけ、児童館・幼稚園などへの慰問は好評だった。子供たちと遊んで、楽しんで、笑って…。保母さんからも「こんな笑顔は初めて見た」と感謝された。仮設では一緒に民謡を歌ったり、踊ったり。「震災以来、初めてうたった」と、涙ながらのお年寄りもいて、こちらもとまどった。なにより、オールKSCという形でチームが組めて、現役・ＯＢの絆が深まった意義は大きい。

でも、東北までは遠い。「また来るよ」と約束しても、すぐには応えてあげられない。時間的な制約があり、被災者とじっくり話す場もとれない。日程はハードにならざるをえず、メンバーにとっても相当きつかった。

私たちは、独自の支援ルートを探り、1年間は続けようと始めたので、4月ごろにはもう一度現地へ行きたい。「心のケア活動を」という強い要望がある。子供たちには“震災後遺症”が出てくるし、仮設のお年寄りは孤立しがち。自治会組織もまだ機能していない。私たちがお手伝いできる場はまだまだ多い。これまで昔遊びや大道芸・マジック・民謡を中心にやってきたが、もう少し幅広い内容、多くのサークルが参加できる企画も考えたい。

資金的な裏付けも欠かせない。1・2次派遣は助成金でまかなってきたが、自前の資金集めも必要だ。幸いカレッジの皆さんの関心は高く、〔サポート募金〕も順調なので、今後も協力していただけそうだ。私たちが先頭に立って、もう少しがんばろう。

（東北支援プロジェクトチームの西田圭一・道満俊徳・大澤貞男・南形徹の話をまとめたものです）